

森 千恵

NPO 法人岡山淡水魚研究会
干潟担当



永江川河口湿地

吉井川は河口から 2km ほど上流に「日本の重要湿地 500」(2001 年 10 月)に選定されたヨシ原があります。1999 年決議(ラムサール登録湿地を倍増しよう!)を受けて、環境省が湿地調査を行った結果です。

さらに、2002 年～2004 年に環境省は「自然環境保全基礎調査」(国内干潟調査)を行いました。同報告書中に「永江川河口は...この海域の他の地点に比べると、小規模ながらも貴重なヨシ原の生態系を残している...」と記述されています(環境省自然環境局、2007)。

この調査の「中国四国・日本海責任者」のひとりが福田宏氏(岡山大学農学部水系保全学研究室)で、社会人学生だった私も調査に何回か同行させていただきました。

森 千恵 氏

生活クラブ生協、PTA 等で活動後、岡山大学大学院自然科学研究科博士前期後期課程で学び 2010 年退学。継続して底生生物の生態調査や、湿地の保全活動に取り組んでいる。在学中に高木仁三郎基金の選考委員を務めた。

湿地通い

2005 年～2007 年、私はオカミミガイ(写真 1)を材料に、ヨシ原湿地特性を論文にしようとしていました。



写真 1 オカミミガイ

この「修士論文」は、読み返すことも憚られる仕上がりで、苦い思い出になっています。それでも、気になる干潟の貝を見にヨシ原詣では続けました。「貝マニア」に言わせるとオカミミガイは所謂「駄貝」(=どこにでもいる、珍しくない貝)。「絶滅危惧」種といわれても、永江川の個体数は夥しく、棲息地のヨシ原は、私が歩き回ってもびくともせず、ケロっと茂って夏中じめーっとした空気を維持し、「湿地の生きものに居心地がよさそうな環境」(=換言すると、ヒトには受け入れ難い環境)を提供します。「実験」と称して貝を持

ち帰っても、絶滅するなんて想像できません。乾燥を防げば実験室で繁殖行動も観察可能。永江川河口湿地の何もかもが頑丈にみえました。

論文ネタの材料をトビハゼに変えていた私は、気晴らしにヨシ原に立ち寄るようになりまし。遠くからの景色も、ヨシの中に入り込んで生き物を見るのも楽しくなってきたのです。誰も彼もが生き活きて見える湿地では、トビハゼの表情も実験室にいるものと全然違って見えます。

湿地の工事

この湿地に思わぬ責任を感じたのは 2009 年のこと。2 月、国交省から、「掘削・浚渫工事」のことで電話が入りました。2 年前の築堤で工事は終了したと思っていたので、「まだやるの? 環境省は何で私に?」と、面食らいました。「湿地の保全」は保証されていると思い込んでいたのです。私は「保全を約束されている湿地」を生物調査に使わせてもらっているお客のつもりでいました。経緯はどうであれ、この湿地に最大の関心を持ち、出入りしているのは私だけで、重い責任を両手に「どさっ」と渡された不意打ちに慌てました。

遅まきながら「保全」を考える

国交省の依頼内容は、「7月開始の掘削・浚渫前にヒロクチカノコ(写真2)、フトヘナタリガイ(写真3)、オカミミガイを確認して欲しい、移植の指導もしてほしい」でした。掘削予定地に2種を確認、多数の貝を対岸湿地に移動しました(詳しくは「岡山の自然」2009年夏号参照)。



写真2 ヒロクチカノコ



写真2 ヒロクチカノコ

私には、この方法が保全になるのかわかりません。「わからないから工事をしないで」という声は、通らない状況でした。「何のための工事だ?」という疑問は、いわば場違いで保全を謳って工事を止めるには空疎な響き。この段階で地元住民向けの工事説明に疑問の余地はありません。



写真3 フトヘナタリガイ

反対できるとしたら14年前の計画時であったでしょう。「控えい!このデータを何と心得る!」「背中はこのデータが目に入らねえか!」そんな黄門様の印籠級、遠山様の彫り物級のデータがあれば・・・。「おらにパワーをくれ~」嗚呼虚しい叫び声。

「湿地の保全」の道、探索中

湿地に隣接している土地が浸水し易いというのは当たり前のこと。湿地保全を目的としているラムサール条約は、保全と人の生活をどう両立させるかという課題を提起します。でも、殆ど知られていません。「気がついたらヨシ原がなくなっていた」という事態を恐れるならば、私だけが知る、私が好きな湿地の様子をまず知ってもらおう。そこで、子どもたちに「すぐ近くに生き物たちが元気に生きている湿地があるよ」と伝えることにしました。総合学習で干潟教室を受けた子どもたちや先生の

「行ってみたい!」の声をきき、すっかり気を良くして、実際にヨシ原を案内することができました。

立ち入りによる環境負荷は課題ですが、話しベタの私の案内でも湿地の存在がカバーしてくれるようです。

初めてヨシ原の生き物を見た人は、一様に「うわ、こんなのがいるんだぁ・・・」と、驚いてくれます。さらに、保全活動に少しずつ参加してもらうため、ゴミ拾いを計画しています。実は、干潟のゴミ片付けは最大の難問です。「ゴミは湿地の一部である。基本的に放置せよ」という福田宏氏の説は尤もです(字数の都合で割愛!)。私も同感。でも・・・。実験区を設けて、太伯小学校のみんなと取り組んでみようという方法を考えているところです。

写真: 第7回自然環境保全基礎調査 浅海域生態系調査(干潟調査)

報告書 2007年3月環境省自然環境局生物多様性センター
撮影: 江木寿男氏



トビハゼ(10.17.干潟教室にて撮影)